

夏目漱石

自轉車日記



自轉車日記

西曆一千九百二年秋忘月忘日白旗を寢室の窓に翻えひるがして下宿の婆ばあさんに降を乞こうやいなや、婆さんは二十貫目の体たい軀いくを三階の天辺てっぺんまで運び上げにかかる。運び上げるといふべきを上げにかかると申すは手間てまのかかるを形容せんためなり。階段あがを上ること無慮四十二級、途中で休憩すること前後二回、時を費すこと三分五セコンドの後この偉大なる婆さんの得意なるべき顔面が苦し気に戸口にヌツと出現する。あたり近所は狭苦しきばかりな

り。この会見の栄を肩身狭くも双肩そうけんに荷になえる余よに向むかつて婆こうわさんは媾和条件の第一款として命令的に左のごとく申し渡した。

自転車にお乗んなさい。

ああ悲しいかなこの自転車事件たるや。余はついに婆さんの命に従つて自転車に乗るべく、いな自転車より落おちるべく「ラヴェンダー・ヒル」へと参らざるべからざる不運に際会せり。監督兼教師は〇〇氏なり。悄しょうぜん然たる余を従えて自転車屋へと飛び込みたる彼は、まず女おんな乗のりの手頃てごろなる奴やつを撰えらんでこれがよかろうと言う。その理由

いかんと尋^{たず}ぬるに、初学入門^{しやうけい}の捷徑^{しやうけい}はこれに限るよと、
 降参人と見てとつていやに輕蔑^{けいべつ}した文句を並べる。不肖
 なりといえども、輕少ながら鼻下に髯^{ひげ}を蓄^{たくわ}えたる男子
 に女の自転車で稽古^{けいこ}をしろとは情ない。まあ落ちてても善^よ
 いから当^{あた}り前^{まえ}の奴で遣^やつてみよう、抗議を申し込む。
 もし採用されなかつたら、丈夫^{じやうふ}玉碎瓦^{がせん}全を恥ずとかなん
 とか珍^{ちん}汾^{ぶん}漢^{かん}の氣炎を吐こうと、暗に下^{した}拵^{ごしらえ}に黙っている。
 とそれならこれに仕^しようと、いとも見苦しかりける男^{おとこのり}乗
 をぞ宛^あてがいける。思えらく能者筆を扱^{えら}ばず、どうせ落
 ちるのだから、車の美醜などはかまうものかと宛^あてがわ

れたる車を重そうに引張り出す。不平なるは力を出して
 上からウンと押して見るとギーと鳴ることなり。伏して
 おもんみ
 惟れば、関節が弛んで油気がなくなつた老朽の自転車
 に、万里の波濤を越えてはるばると逢いに來たようなも
 のである。自転車屋には恩給年限がないのかしらんと、
 ちよつと不審を起してみる。思うにその年限はとツくの
 昔に來ていて、今まで物置の隅に閑居静養をもつぱらに
 した奴に違ちがない。計らざりき、東洋の孤客に引きずり
 出され奔命に堪たえずして悲鳴を上あげるに至つては、自転車の
 末路また憐あむべきものありだが、せめては降参の腹癒は

にこの老骨をギューと言わしてやらんものをと乗らぬさ
 きから当人はしきりに乗り気になる。しかるにハンドル
 なるもの神経過敏にて、こちらへ引けば股またにぶつかり、
 向むこうへ押しやると往来の真中まんなかへ馳かけ出そうとする。乗ら
 ぬうちからかくのごとく処置に窮するところをもってみ
 れば乗った後の事は思いやるだに涙の種たねと知られける。
 「どこへ行って乗ろう」「どこだつて今日初きょうめて乗るの
 だから、なるたけ人の通らない、道の悪くない、落ちて
 も人の笑わないような所に願いたい」と降参人ながらい
 ろいろな条件を提出する。仁恵なる監督官は、余が衷情

を憐んで、「クラパム・コンモン」の傍かたわら人跡あまり繁しげからざる大道の横手馬乗場よこてうまのりばへと余を拉らっし去る。しかして後「さあ、ここで乗ってみたまえ」という。いよいよ降参人の降参人たる本領を發揮せざるをえざるに至った。ああ悲しいかな。

乗ってみたまえとはすでに知己てんがいの語にあらず。その昔、本国にあつて時めきし時代より天涯万里孤城落日資金窮乏の今日に至るまで、人の乗るのを見たことはあるが、自分が乗ってみたまおぼええはもうとうない。さるを乗ってみたまえとはあまり無慈悲なる一言と、怒髪鳥打帽ついでを衝て

猛然とハンドルを握ったままでは天晴武者振り頼母しかつたが、いよいよ鞍くらに跨またがって顧盼勇こけいを示す一段になると、お誂あつらえどおりに参らない。いざという間際まぎわでずどんと落ること妙なり。自転車は逆立さかだちもなにもせず至極落付おちつきはら払つたものだが、乗客だけはまさに鞍壺くらつぼにたまらずずんでんどうとこける。かつて講釈師きやくしに聞きたとおりを目まのあたりみずから実行するとは、あに計らんや。

監督官言う、「初めから腰を据すえようなどというのが間違まちがっている。ペダルに足を掛けようとしても駄目だめだよ。ただしがみ付ついて車が一回転でもすれば上出来じょうできなんだ」、

と心細いことかぎりなし。ああ吾事^{わが}休す。いくらしがみ付ても車は半輪転もしない。ああ吾事休すと、しきりに感投詞を繰^くり返して暗に助勢を嘆願する。かくあらんとはかねて期したる監督官なれば、近く進んで、さあ、僕がしつかり抑^{おさ}えているから乗りたまえ。おっとそうまともに乗っては顛^{ひっく}り返る。そらみたまえ。膝^{ひざ}を打^うたろう。今度はそーつと尻^{しり}を懸^かけて両手でここを握^{にぎ}って。よしか。僕が前へ押し出すからその勢^{いきおい}で調子に乗って馳^かけ出すんだよ。と怖^{こわ}がるものを面白^{おもしろ}半分前へ突き出す。しかるにすべてこれ等^らの準備すべてこれ等の労力が突き出され

る瞬間において、砂地に横面を抛りつけ^{ほう}るための準備に
 してかつ労力ならんとは実に神ならぬ身の誰か^{たれ}知るべき
 底^{てい}の驚愕^{きょうがく}である。

ちらほら人が立ち留^{どま}って見る。にやにや笑って行くも
 のがある。向うの櫛^{かし}の木の下に乳母^{うば}さんが小供^{こども}をつれて
 口ハ台に腰を懸^{かけ}けてさつきからしきりに感服して見てい
 る。なにを感服しているのか^{わか}分らない。おおかた流汗
 淋漓^{りんり}大童^{おおわらわ}となって自転車と奮闘しつつある健気^{けなげ}な様子
 に見とれているのだらう。天涯この好知己を得る以上は
 向^{むこう}脛^{すね}の二三カ所を擦^すりむいたって惜しくはないという

気になる。「もう一遍いっぺん頼むよ。もつと強く押してくれたまえ。なにまた落ちる？ 落ちたって僕の身体からだだよ」と降参人たる資格を忘れて、しきりに汗気炎を吹いている。するとだしぬけに後ろうしろから「Sir」と呼んだものがある。はてな、めったな異人ちかづきに近付はないはずだがと振り返ると、ちよつと人を狼狽ろうばいせしむるに足てきるの大巡査がヌーッと立っている。こちらはこんな人に近付ではないが、先方ではこのポット出のチンチクリンの田舎者いなかものに近付ちかづかざるべからざる理由があつて、まさに近付いたものとみえる。その理由いわに曰く、ここは馬を乗る所で自転車に乗

る所ではないから、自転車を稽古けいこするなら往来へ出て遣らしやい。オーライつつし謹んで命を領すと、混淆こんこう式の答に博学の程度を見せて、すぐさまこれを監督官に申出もうしでる。と監督官は降参人の今日の凹へこみ加減かげん十分とや思いけん、もう帰ろうじやないかと言う。すなわち乗れざる自転車と手を携えて帰る。どうでしたと婆さんの問とひに敗余の意気いきをもらすらく、車嘶いなないて白日暮れ、耳鳴って秋気来きたるへん。

忘月忘日 例の自転車を抱いて坂の上に控えたる余はおもむろに眼を放ってはるかあなたの下を見回す。監督

官の相図あいずを待って一氣にこの坂を馳かけ下おりんとの野心あればなり。坂の長さ二丁余、傾斜の角度二十度ばかり、路幅みちはば十間を越こえて人通ひとどおり多からず。左右はゆかしく住みなせる屋敷ばかりなり。東洋の名士が自転車から落おちる稽古をすると聞いて、英政府が特に土木局に命じてこの道路を作らしめたかどうだか、その辺はいまだに判然しないが、とにかく自転車用道路として申もうし分ぶんのない場所である。余が監督官は巡査の小言こごとに胆を冷したもののか、ないしはまた余の車を前へ突き出す労力を省くためか、昨日から人と車を天然自然ところがすべく、特にこの地を

相し得て余を連れだしたのである。

人の通らない馬車のかよわない時機を見計つたる監督官はさあ今だ早く乗りたまえという。ただしこの乗るという字に註釈が入る。この字は吾等兩人の間にはいまだ普通の意味に用^{もちい}られていない。わがいわゆる乗るは彼等のいわゆる乗るにあらざるなり。鞍^{くら}に尻^{しり}を卸^{おろ}さざるなり。ペダルに足を掛けざるなり。ただ力学の原理に依頼して毫^{ごう}も人工^{ろう}を弄^{ろう}せざるの意なり。人をもよけず馬をも避けず水火をも辞せず驀^{ばく}地に前進するの義なり。さるほどにその格好^{かっこう}たるやあたかも疝^{せん}氣^き持^{もち}が初出^{でぞめ}に梯子^{はし}乗^ごを演

ずるがごとく、吾ながら乗るといふ字を濫用してはおらぬかと危ぶむくらいなものである。されども乗るはついに乗るなり。乗らざるにあらざるなり。ともかくも人間が自転車に付着しているなり。しかも一気呵成かせいに付着しているなり。この意味において乗るべく命ぜられたる余は、疾風のごとくに坂の上から転ころがりだす。すると不思議やな、左の方の屋敷の内から拍手してわが自転行を壮にした、いたずらものがある。妙だなと思ふ間もなく車はすでに坂の中腹へかかる。今度はたいへんな物に出逢であった。女学生が五十人ばかり行列を整えて向むこうからやつ

てくる。こうなつてはいくら女の手前だからと言つて氣取るわけにもどうするわけにもゆかん。両手は塞ふさがつている。腰は曲つている。右の足は空を蹴けつている。下りようとしても車のほうで聞かない。絶体絶命しようがな
いから自家独得の曲きよくのり乗のままで女軍の傍かたわらをからくも通り抜ける。ほつと一息つく間もなく車はすでに坂を下りて平地にあり。けれども毫も留まる氣色けしきがない。しかのみならず向うの四ツ角に立たつている巡査の方へ向けて
どンドン馳けて行く。氣が氣でない。今日きょうも巡査に叱しかられることかと思ひながらも、やはり曲乗の姿勢をくずす

わけにゆかない。自転車は我に無理情死を逼る勢で、
 むやみに人道の方へ猛進する。とうとう車道から人道へ
 乗り上げ、それでも止まらないで板塀へぶつかって逆
 戻もどりをすること一あやう間半、危くも巡查を去る三尺の距離で
 とまった。だいぶお骨ほねが折おれましようわらいと笑ながら査公
 が申されたゆえ、答えて曰いわく、イエス。

忘月忘日 「……お調べになる時はブリチツシュ・ミ
 ュジャームへお出掛でかけになりますか」「あすこへはあまり
 参りません。本へやたらにノートを書き付つけたり棒を引
 いたりする癖があるものですから」「さよう。自分の本

のほうが自由に使えて善いいですね。しかし私などは著作を仕ようと思うとあすこへ出掛ます……」

「夏目さんはたいへん御勉強だそうですね」と細君が傍かたわらから口を開く。「あまり勉強もしません。近ごろは

人から勧められて自転車を始めたものですから、朝から晩までそればかりやっています」「自転車は面白おもしろうござんすね。宅ではみんな乗りますよ。あなたもやはり遠乗とおのりをなさいましょう」「遠乗をもつて細君から擬せられた先生は実に普通の意味において乗るちようことのいかなるものなるかをさえ解しえざる男なり。ただ一種の曲解せ

られたる意味をもつて坂の上から坂の下までかろうじて
乗り終おおせる男なり。遠乗の二字を承つて心安からず思
しが、掛直かけねを言うことが第二の天性とまで進化せる二十
世紀の今日、この点にかけては一人前に通用する人物な
れば、如才じよさいなく下のごとく返答をした。「さよう。遠乗
というほどの事もまだしませんが、坂の上から下の方へ
勢よく乗りおろす時なんかすこぶる愉快ですね」
今まで沈黙を守っておつた令嬢は此こいつ奴少しは乗きるな
と疇違かんちがいをしたものとみえて、「いつか夏目さんといっ
しよに皆でウィンブルドンへでも行つたらどうでしよ

う」と父君と母上に向つて動議を提出する。父君と母上
 はいっせいに余が顔を見る。余ここにおいてか少々尻こ
 そばゆき状態に陥るの已むをえざるに至れり。さりなが
 ら妙齡なる美人より申し込まれたるこの果し状を真平御
 免蒙ると握りつぶすわけにはゆかない。いやしくも文
 明の教育を受けたる紳士が婦人に対する尊敬を失しては
 生涯の不面目だし、且つやこれでもかこれでもかと余
 が咽喉を扼しつつある二寸五分のハイカラの手前もある
 事だから、ことさらに平氣と愉快を等分に加味した顔を
 して「それは面白いでしょう。しかし……」 「御勉強で

お忙しいでしょうが、今度の土曜くらいはお閑ひまでいらつ
しやいましょう」とだんだん切り込んでくる。余が「し
かし……」のあとには必ずしも多忙が来ると限っておら
ない。自分ながらなんのための「しかし」だかまだ判然
とせざるうちにこうさきを越されてはいよいよ「しかし」
の納り場がなくなる。「しかしあまり人通りの多い所で
はエー……アノーまだ練なれませんか」とようやく一方
の活路を開くやいなや「いえ、あの辺の道路は実に閑静
なものですよ」とすぐ通せん坊をされる。進退これきわま惟谷ひとる
とは畜ただに自転車の上のみにてはあらざりけり、と独りひとで

感心をしている。感心したばかりでは埒らちがあかないから、
 この際唯一の手段として「しかし」をもう一遍いっぺん繰り返す。
 「しかし……今度の土曜は天気でしょうか」旗幟きしの鮮明
 ならざることおびただ夥おびただしい。誰に聞いたって、そんな事が分わか
 るものか。さてもこの勝負男のほう負とや見たりけん、
 審判官たる主人は仲裁ちゆうさいこ乎として口を開いて曰いわく、日はき
 めんでもいずれそのうち私が自転車でお宅へ伺いませよ
 う。そしていっしょに散歩でもしましょう。——サイク
 リストに向むかつていっしょに散歩でもしましょうとはこれ
 いか。彼は余を目してサイクリストたるの資格なきも

のと認定せるなり。

このうつくしき令嬢と「ウインブルドン」に行かなかつたのは余の幸であるかはた不幸であるか、かんが考うること四十八時間ついに判然しなかつた。日本派の俳諧師はいかいしこれを称して朦朧体もうろうたいという。

忘月忘日 数日来の手痛き経験と精緻せいちなる思索とによって余よは下の結論に到着した。

自転車の鞍くらとペダルとはなにも世間体を繕つくろうために漫然と付着しているものではない。鞍は尻かを懸かけるための鞍にしてペダルは足を載せかつ踏み付けると回転

するためのペダルなり、ハンドルはもつとも危険の道具にして、ひとたびこれを握るときは人目を眩げんせしむるに足る目勇めざましき働きをなすものなり。

かく漆桶うるしおけを抜くがごとく自転悟を開きたる余は今例

の監督官およびその友なる貴公子某伯爵とともに鑢くつわを

連ねて「クラパムコンモン」を横ぎり鉄道馬車の通う大通りへ曲らんとするところだと思いたまえ。余の車は両君の間に介在して操縦すでに自由ならず。ただ前へ出られるばかりと思いたまえ。しかるに出られべき一方口が突然塞ふさがったと思いたまえ。すなわち横ぎりにかかる途端とたん

に右の方より不都合なる一両の荷車が御免よともなんと
も言わず傲然ごうぜんとしてわが前を通つたのさ。今までの態度
を維持すれば衝突するばかりだろう。余の主義として衝
突はこちらが勝つ場合についてのみあえてするが、その
他負色まけいろの見えすいたような衝突になるといつでも御免
蒙ごうむるのがわが家伝来の憲法である。さるによつてこの
尙大なる荷車と老朽悲鳴をあげるほどのわが自転車との
衝突は、おやじの遺言としても避けねばならぬ。といっ
て左右へよけようとすると御両君のうちいずれへか衝突
の尻をもつてゆかねばならん。勿体なくも一人ひとりは伯爵の

若殿様で、一人はわが恩師である。さような無礼な事は
 平民たる我々風情ふぜいのすまじきことである。のみならず捕
 虜ほの分際として推参しよさな所作と思わるべし。孝ならんと欲
 すれば礼ならず、礼ならんと欲すれば孝ならず。已やむな
 くんば退却か落車の二あるのみと、ちよつとのあいだに
 相場が極ってしまった。この時事に臨んでかつて狼狽ろうばいし
 たることなきわれつらつら思うよう、出来できさえすれば、
 退却もまんざらでない。少なくとも落車に優まさること万々
 なりといえども、悲しいかな逆艦さかろの用意ととのいまだ調わざ
 る今日の時勢なれば、エー仕方しかたがない。思い切つて落車

にしろ、と両車の間にどうと落つ。おりしも余を去るこ
と二間ばかりの処に退屈たいくつそうに立っていた巡査——自転
車の巡査におけるそれなお刺身のツマにおけるがごとき
か、なんぞそれ引き合あいに出るの甚はなはだしき——このツマ的
巡査が声を揚げてアハ、アハ、アハ、と三度笑った。そ
の笑い方苦笑にあらず、冷笑にあらず、微笑にあらず、
カンラカラカラ笑わらいにあらず、全くの作り笑なり。人か
ら頼まれてする依托笑いたくわらいなり。この依托笑をするためにこ
の巡査はシックスペンスを得たか、ワン・シリングを得
たか、遺憾ながらこれを考究する暇がなかった。

へんツマ巡査などが笑ったつてとすぐさま御両君の後を慕つて馳^かけだす、これが巡公でなくつて先日のお娘さんだつたらやはりすぐさま馳^かけだされるかどうかの問題はいざとならなければ解釈がつかないから質問しないほうがいいとして先へ進む。さて両君はこの辺の地理不案内なりとの口実をもつて覚^{おぼつか}束なき余に先導たるべしとの嚴命を伝えた。しかるに案内には詳しいが自転車には毫^{ごう}も詳しくないから、行こうと思つ方へは行かないで曲り角へくるとただ曲り易い方へ曲つてしまふ。ここにおいてか同じ所へ何返も出て来る。はじめのうちはなんと

かかんとか胡魔化^{ごまか}していたが、そうは持ち切れるものではない。今度は違った方へ行こうとの御意^{ぎよ}である。よろしいと口には言ったようなものの、儘^{まま}にならぬは浮世の習^{なりい}、容易にそつちの方角へ曲らない。道幅三分の二も来たころ、やっとの思^{おも}でハンドルをギューツと振^ねったら、自転車は九十度の角度を一どきに回ってしまった。その急回転のために思^{おも}掛^{がけ}なき功名を博し得たというお話しは、明日の前講になかという価値もないから、すぐ話してしまう。この時まで気がつかなかったが、この急劇なる方向転換の刹那^{せつな}に余と同じ方角へ向けて余に尾行

して来た一人のサイクリストがあつた。ところがこの
 不意撃ふいうちに驚おどいて車をかわす暇もなくもろくも余の傍かたわらで
 転ころがり落ちた。あとで聞けば、四ツ角を曲る時にはベル
 を鳴ならすか片手をあげるか、ひととおりの挨拶あいさつをするのが
 礼れいだそうだが、落天の奇想を好む余はさような月並主義つきなみしゅぎ
 を採とらない。いわんやベルを鳴したり手を挙げあげたり、そ
 んな面倒めんどうな事をする余裕はこの際少しもなきにおいてを
 やだ。ここにおいてかこのダンマリ転換を遂行するのも
 余にとっては万已やむむをえざるに出たもので、余のあとに
 喰くっ付つて来た男が吃驚びっくりして落車したのもまた無理のないと

ころである。双方共無理のないところであるから不思議
 はない。当前あたりまえの事であるが、西洋人の論理はこれほど
 まで発達しておらんとみえて、彼の落ち人大お うどに逆鱗げきりんの体てい
 で、チンチンチャイナマンと余を罵ののしった。罵られたる
 余は一矢酬むくゆるはずであるが、そこは大悠だいゆうなる豪傑の
 本ほん性をあらわして、お気の毒だねの一言を遺のこして振り向むき
 もせず曲まつて行く。実は振り向こうとするうちに車が
 通り過ぎたのである。「お気の毒だね」よりほかの語が
 出てこなかつたのである。正直なる余よは苟且かりそめにも豪傑な
 どいう、一種くせものの曲者まと間違まちがえらるるを恐れて、ここにゆつ

くり弁解しておくなり、万一余を豪傑だなどと買被^{かいかぶ}つて失敬な挙動あるにおいては七生^{しちしょう}まで崇^たるかもしれぬ。

忘月忘日 人間万事漱石の自転車で、自分が落ちるかと思うと人を落すこともある。そんなに落胆したものでもないと、今日はズーズー敷^{しく}構えて、バタシー公園へと急ぐ。公園はすこぶる閑静だが、その手前三丁ばかりの所が非常の雑沓^{ざつとう}な通りで、初学者たる余にとっては難透難徹の難関である。今しも余の自転車は「ラベンダー」坂を無難に通り抜けて、この四通八達の中央へと乗り出す。向うに鉄道馬車が一台こちらを向いて休んでいる。

その右側に非常に大なる荷車が向うむきに休んでいる。その間約四尺ばかり、余はこの四尺の間をすり抜けるべく車を走らしたのである。余が車の前輪が馬車馬の前足と並んだ時、すなわち余の身体からだが鉄道馬車と荷車との間にはいりかけた時、一台の自転車むこうが疾風のごとく向から割り込んで来た。かような咄嗟とっさの際には命が大事だから退却に仕しようか落車に仕ようかなどの分別は、さすがの吾輩わがはいにも出なかつたとみえて、おやと思つたら身体はもう落ちておつた。落方おちかたが少々まずかつたので、落る時左の手でしたたか馬の太腹を叩たたいて、からくも四よつんばい這の

不体裁を免まぬがれた。やれうれしやと思ふ間もなく鉄道馬車は前進しはじめる。馬は驚おどろいて吾輩の自転車を蹴け飛とばす。相手の自転車はなに喰くわぬ顔ですうと抜けて行く。間の抜ぬき加減かげんは尋常一様にあらず。この時派出はでやかなるギグに乗って後ろから馳かけ来きたりたる一個の紳士、策を揚げざまに余が方を顧みて曰いわく、大丈夫だ安心したまえ。殺しやしないのだからと。余心中ひそかに驚いて言う。してみると時には自転車に乗せて殺してしまふのがあるのかしらん。英国は險吞けんのんな所だと。

余が甘貫よ にじゅつかんめ目の婆さんに降参して自転車責ぜめに遇あつてよ
 り以来、大落五度小落はその数を知らず。ある時は石垣いしがき
 にぶつかつて向脛むこうずねを擦すりむき、ある時は立木たちきに突き当
 って生爪なまづめを剥はがす。その苦戦言うばかりなし。しかして
 ついに物にならざるなり。元来この二十貫目の婆さんは
 むやみに人を馬鹿ばかにする婆さんにして、この婆さんが皮
 肉に人を馬鹿にする時、その妹の十一貫目の婆さんは、
 瞬まばたきもせず余が黄色な面を打守りうちまもりていかなる変化が余
 の眉目びもくの間に現あらわるるかを検査する役目を務つとめる。お役
 目御苦勞のいたりだ。この二婆さんの呵責かしゃくに逢あつてより以

来、余が猜疑心さいぎしんはますます深くなり、余が継子根性ままここんじようは日に日に増長し、ついには明け放しあはなの門戸を閉鎖して、わが黄色な顔をいよいよ黄色にするの已やむをえざるに至れり。かの二婆さんは余が黄色の深淺を測って彼等かれら一日のプログラムを定める。余は実に彼等にとって黄色な活動晴雨計であつた。たまたま降参を申し込んで贏し得たるところ若干いくばくぞと問えば、貴重な留学時間を浪費して下宿の飯を二人前食いにすぎず。さればこの降参は我に益なくして彼に損ありしものと思惟しす。無残なるかな。

(明治三六・六・二〇「ホトトギス」)

日本文学電子図書館

自転車日記

著者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底本 「漱石全集 第1巻」角川書店
昭和42年10月10日 8版発行



日本文学電子図書館